

転換期に園丁途方にくれる

『蝶の雑記帳 125』

二十世紀の末期以来、資本主義が行きづまっている、あるいは、時代は転換期を迎えているという見方が広まり、さまざまな方面から「現代の資本主義社会」はどうなっていくのかという議論がなされてきた。愚鈍な園丁も長らく、そういう議論に耳を傾けて世の中がどうなっていくかを知らうと努めてきたが、さまざまなデータがいつも経済の危機を示すなか、資本主義が巧妙に危機をすり抜けてすでに数十年経ったことにあきれている。だが、多くの識者が言うように現状は変えられなければならないと園丁も考えるので、危機を深めるばかりの状況に途方にくれている。その一方で、現代資本制が示している事象は本質的に歴史的なもので、つまるところ、経済学者もほかの学者も予測することはできないのだ、と思うようになっている。それでも世界中で、変転する現代資本制を何とか理解しようとする関心はむしろ高まっており、最近、その関心に応えようとする出版物が目立つ。園丁は、教えてくれることがあるだろうと、懲りもせずそれらのいくつかをわずかに読んで学習しようとしている。

I. J. ヒッケル著『資本主義の次に来る世界』

最近 J. ヒッケルという人の『資本主義の次に来る世界』という著作を読んだのも、新聞書評が「必読の脱成長論」と勧

めているのに誘われたからである。本の帯の折り込み部分には、「人類や地球に不幸と破滅をもたらさない、成長に依存しない次なるシステムとは何か？ 経済人類学者が描く、かつてない文明論と未来論」と書いてある。園丁はかつてない文明論を勉強することになった。

だが、最初から思索の対象を文明論や未来論に広げると、現代の人類社会が直面している諸問題を考えなければならない。それは園丁の手に余るから、まず、さし迫った問題として気がかりな現在の資本主義がもたらしている問題から考えていくことにしよう。それがこの書物が掲げている主題でもある。ところで、一般に資本主義が議論されるとき、資本制経済を対象とする狭義の「資本主義」と、資本制経済が支配する社会と政治の体制まで含む広義の「資本主義」との区別があいまいなままにされがちである。それでは資本主義の問題を適切に論じることができない、と園丁は考える。分相応に、分節的な考察から始めることにする。そこで、著書『資本主義の次に来る世界』の「はじめに」や第一章以下で表明されている、著者の哲学的な観点についての批判はあとまわしにしよう。

「資本主義 — その血ぬられた創造の物語」という表題を掲げる第 1 章の初めの方に、「市場は何千年にもわたって、さまざまな時代や場所に存在したが、資本主義が誕生したのはわずか 500 年前だ。… 資本主義は拡張主義的な経済シス

テムであり、常にますます多くの資源と労働を商品生産の回路に取り込む」、と概括している。資本主義についてのこの概括はほぼ通常言われていることと違わない。ヒッケルは、それを、資本主義は「自然と労働から多くを取り、少なく返せ」という法則に従って機能している、と言い換える。資本の運動に明示的に自然という関係項をとり入れれば、「生態系の危機は、このシステムが必然的にもたらす結果だ」、「資本主義は生物界とのバランスをわたしたちから奪った」という重要な視点が立ち現われる。この書物はヒッケルを経済人類学者と呼んでいるが、エコロジーを含む社会的・経済学的な思想と活動にコミットしている人なのだろう。

その第1章でヒッケルは、封建社会がどのように打倒されて資本主義が現われて来たかの歴史を概略し、あわせて、それに対応する思想の発展史を記述しようとする。しかしわたしは、その経済発展の歴史と思想史の概略的記述、とくに後者の記述は一面的で十分緻密なものではない、と考える。言い過ぎになるけれども、その程度の歴史把握で人類の文明を論じていると言うのは出版社の誇大な宣伝だ、と思った。園丁は、近世から近代にかけての経済の歴史についても、もっとすぐれた研究書を参照しなければならない、と思う。思想史については最初に言ったようにあとで別に論じよう。

第2章は、表題が示すように、資本主義の“圧倒的破壊力”を語ろうとする。その破壊力を生み出す資本の自己増殖の運

動を説明するのに、マルクスの定式「 $M \rightarrow C \rightarrow M'$ 」から始めるのは、型どおりと言えるだろう。そこからの説明は当然、論者独自のものとなる。ヒッケルは、投資家は成長を追い求め、増殖を求める資本の運動が暴力的となること、などを述べる。そして、GNP(GDP)という指標の設定が私的な成長要求を公的な執着へ導いた、と指摘する。今では、世界の政府がどこでも経済成長を追求するようになり、「成長」は経済と政治に深く組み込まれ、どちらのシステムも成長なしには存続しえないほどになった。成長が止まれば、現在のシステムは機能しなくなる…、と。

ヒッケルは、われわれの世界が貪り食われるようになってい、と表現する。① 資源（利用できる物資とエネルギー）の消費量の爆発的増加、② 気候変動、③ 生態系への破壊的影響など、実際に拡大しつつある重大な被害を挙げている。しかし、「資本主義の次に来る世界」を語ろうと急いでいるせいか、ここの部分で、「世界が貪り食われている」危機的状況についての考察と議論が十分練られていない、と園丁は思う。地質年代として「人新世」という名づけが必要なほどの地球の状況は、生命と人類にとっての重大事である。単に資本主義システムが生み出している問題の一つということを超えて、現代資本主義に絡みついて一体化した重大な問題である。「資本主義の次に来る世界」を主題とする書物は、紙幅を費やすとしても、「人新世」の問題にもっと鋭く深く言及する必要がある。

もちろん、ヒッケルが糾弾するように、「自然と人間の生命を商品化して蓄積の回路に投げ込む」資本主義を超えるシステムへと転換しなければならない。だから、「21 世紀に成長の限界をどう考えるか」が問題である。園丁の期待が大きすぎるからだろうか、第 2 章が記述する問題の把握と問題解決へのアプローチ提示に、もの足りなさを感じてしまった。第 3 章「テクノロジーはわたしたちを救うか？」は議論の必要な章だが、すでに斎藤幸平の書物『人新世の「資本論」』や『ゼロからの「資本論」』などを読んでいるからだろう、迫力に欠けるように思った。

この書物は二部構成になっていて、「少ないほうが豊か」というタイトルの第二部は、第 4 章から第 6 章までの三つの章から成る。“経済人類学者”ヒッケルは、ここで、独自の議論と提唱を提示する。夏バテ気味の園丁はそれを要領よくまとめて整理し批評することができないので、各章の項目の表題を記録して、今後の考察のための参照とすることにしよう。それらの項目は、今後「資本主義の次に来る世界」を構想するための要点となる、と期待することができる。

第 4 章は、「良い人生に必要なものとは何か」という素朴で基本的な問いを立て、現代資本主義のかかえる問題点を指摘しながら、代替の考え方を次のような項目によって示す。

i. 「成長は進歩をもたらすか?」、ii. 「GDP は人を幸福にで

きない」、iii.「成長のない繁栄」、iv.「サウスのための公正さ」、v.「イデオロギーからの脱却」、vi.「イノベーションは成長を必要とするか」、vii.「新しい進歩の指標が世界を正しい方向へと導く」。

これらの項目の取り上げ方と文の表現は、ヒッケルの考え方の特徴を表わしている。人によって受けとめ方は異なるかもしれない。現状でなんとか足りていると思う人が多いだろうから、その縮小を求める「脱成長」という考え方に抵抗を感じる人が少なくないだろう。「サウスのための公正さ」は、世界経済における南北問題を批判し、格差の是正が現代資本主義の弊害の改善につながることを言おうとしている。そのほかの項目も、産業活動を拡大することが必要とする現在の常識を覆そうとしている。.

第5章「ポスト資本主義への道」は、実行策を挙げていく。まず、i.「大量消費を止める5つの非常ブレーキ」が5つの具体的ステップを提言する。①「計画的陳腐化を終わらせる」、②「広告を減らす」、③「所有権から使用权へ移行する」、④「食品廃棄を終わらせる」、⑤「生態系を破壊する産業を縮小する」は、資源を消費する現行の経済的慣例をやめることの提言である。さらに、ii.「仕事はどうなる?」、iii.「不平等を減らす」、iv.「公共財を脱商品化し、コモンズを拡大する」、v.「(ほんとうの)豊かさが成長の解毒剤となる」、vi.「債務を帳消しにする」、vii.「新たな経済のための新たな資金」、viii.「ポスト資本主義のイメージ」、

ix. 「民主主義の力」と続く。ii では「労働時間の短縮」、iii では「公共貨幣システム」のような具体策が言及されている。viii と ix では、ムーブメントが必要なこと、民主主義は資本主義と対立することが指摘されている。これらの課題に取り組むことが困難なことは自覚されている、と思われる。

第 6 章は、資本主義の次に来る世界を構想するためには、人類が基本的な考え方を改めなければならないことを説く。しかし、表題「すべてはつながっている」が、その課題が容易ではないことを示唆する。著者は、i. 「祖先の智慧」、ii. 「アニミズムのエコロジカルな暮らし」、iii. 「デカルトの敗北とスピノザの勝利」、iv. 「第二の科学革命が明らかにする人間と他の生物との関係」、v. 「ポスト資本主義の倫理」、vi. 「少ないほうが豊か」という六つの項目を立てて、議論していく。iv では、生物学的な知見の進展をうけた新しい生物観をもって、エコロジカルな行動を追求することを求めている。しかし、v の議論は十分練られていないとわたしは思う。また、この書物のサブタイトルと言える最後の「少ないほうが豊か」ということばは、標語として意味をもつけられども、もう何十年も“終わり”が告げられてきた資本主義のしぶとさを前に迫力不足と感じざるをえない。

最後に、園丁は愚考をつけ加えずにはおれない。それは、ヒッケルという経済人類学者の哲学観についてである。第 6 章の i・ii・iii が示す考え方は「はじめに」と第 1 章にすで

に現われていたのであるが、著者の“脱成長論”やエコロジカルな立場からする現代資本主義からの脱却という主張に基本的に賛同するので、その提言を損なうことのないように、それに対する批判をあとまわしにしたのである。

「はじめに」で著者は、資本主義が興隆してきた近世と近代について、「人間は自然と切り離された存在で、自然は不活発で機械的な存在である」という“世界観”が支配的になった、ととらえていることを明らかにし、“プラトンに始まりデカルトで完成したこの思想”を「二元論」と呼んでいる。そして著者は、第6章で、近代になってアニミズムから二元論へ移行したのだが、再びアニミズムへ回帰すべきだ、と主張する。

資本主義経済がその活動を発展させた時代の思想の展開については、第1章に概略されている。そこでは、F. ベーコンや J. ロックや D. ヒュームなどの名を挙げながら資本主義の思想的な側面を述べる。そこでは、デカルトの二元論が人間と自然を分断し、資本主義が自然と身体から収奪することを思想的に助けたという見方を主張する。近世から近代にかけて興ってきたこのような思想を糾弾し、他方で、古代のアニミズムを再び取り戻す必要性を訴えるのである。

現代資本主義を脱却しなければならないという考えから、20 世紀に流行した現実離れしたポストモダニストを批判するなどのところで、園丁は著者の姿勢に同意できる。しかし、

資本主義を支える思想を二元論と概括し、資本主義を超えるためにアニミズムを復古させようとするその記述は、あまりにおおざっぱで、思想についての考察が十分緻密ではない、と思わざるをえない。もちろん、どのような哲学的な思想をいadakかは人それぞれである。それでも、この書物は、500年間も社会と政治を支配してきた資本主義に代わる経済・社会・政治システムを構想しようとするのだから、思想史においてももっと厳正な議論を提示するのではなければならない、と思う。それが困難な課題であることは重々承知しているし、園丁にすぎない者が言うのもはばかられるけれども、文明論や未来論にかかわる重大な問題に対して論を立てようとするのだから、基礎的な思想にかかわるところで、時間のかかる考察は必要だと思う。

哲学史において、経験論を立ち上げたロックやヒュームの功績はとても重要なものである。しかしその人たちが偉大だとしても、その時代の社会で共有されていた知識と考え方のなかで考えたのである。その言説が時代の拘束を受けることは仕方のないことと考えなければならない。それでも、ロックやヒュームは、時代を越えていく哲学的な考察をもたらしたのである。資本主義はそういう時代に興隆したから、資本主義的な思考法がロックやヒュームに影響を与えたのは自然なことであった。400 年もあとの現代、哲学思想は変遷を遂げてきたが、現代思想にはデカルトやロックやヒュームの思想が改変されて流れ込んでいるのである。その現代思想と

はまったく別のものとして資本主義的思考があるのではない。そういう資本主義から脱却しようとする運動は、アニミズムからすくいとることのできる思想があるとしても、現代の思想的基盤から出発して取り組むほかない。それを考えずに古代のアニミズムを持ち出すのは、思考の怠慢と言われてもしかたがない。現代思想の絡みついた資本主義を脱却するには、現にわれわれが共有しているその現代思想を同時に揺り動かしていく方法しかない。エコロジストの尊重する生物学的な知見は、アニミズムからではなく、現代思想の一部である自然科学（ベーコンも寄与した）によってもたらされたのである。

もう一言つけ加えるとすれば、わたしは、資本主義システムの形成は長い時間をかけた歴史的な出来事だ、と考える。そして、歴史は、未熟な生物である人間たちが試行錯誤するなかで、その時々で多くの可能な道筋のうちの一つが偶然に選択されて記されてきた、と考える。だから、資本主義の先にどのようなシステムが形成されるかは予測がむずかしい、と思う。それでも、近代になっての人間のわずかばかりの進歩のおかげで、未来は、人間たちの能動的な働きが大なり小なり寄与してつくられるのだ、とも思う。だから、資本主義を乗り越えるには、過去ではなくわれわれが現在到達している思想を鍛えて、未来へ働きかけるべきだ、と考える。

Ⅱ. 大澤真幸著『資本主義の〈その先〉へ』

資本主義は思想を育むのに貢献する出版業にも貫徹している。次に読んだ大澤真幸著『資本主義の〈その先〉へ』でも、宣伝文句が呼びかける。「資本主義の概念を大幅に刷新し、〈その先〉へ行くための原理を示した決定的論考!」、
「資本主義をめぐる著者の探求の最高到達点」と。読んでみて、この宣伝文が今の著者の主観的な心持ちから大きくはかけ離れていないと知った。文章に知性あふれる人の、資本主義についての探求到達点を知らなければならない。

「はじめに」に、資本主義を「包括的な社会現象」としてとらえる、という考えが表明されている。そして、「資本主義は、観念も経済的土台そのものもその一部に含むトータルなメカニズム」であり、「観念の力もまた、資本主義的な運動の一部として発動している」と考える。これらのとらえ方はマルクスと同じと言えるだろう。この観点から、社会学者大澤真幸は、資本主義の〈その先〉を論じようとする。しかし、『資本論』から 150 年経っても終わらない資本主義を眼前にして、現代の社会学者は新たな論じ方をしなければならないと考え、「資本主義の根幹的な条件を徹底的に肯定し、資本主義の自己否定に至るまでにその条件を肯定して」でも、「資本主義を、その内側から、内在的に乗り越える」ほかない、と考える。

そのために大澤がとり上げるのは「観念の力」である。「哲

学者たちは世界をたださまざまに解釈してきただけである。肝腎なのはそれを変えることである」というマルクスのことばを乗り越えようとして、「〈解釈〉はすでに〈変革〉の一部であり、まずはこの哲学者の仕事が必要である」と表明して、「〈変革〉に対して先行する〈解釈〉」によって一歩を踏み出そうとする。

第1章は、著者の問題意識を提示する。小節の表題に、「賭博と黙示録」や「時間かせぎの資本主義」や「安楽死か、それとも終わらない延命か」や「量子論の裏返し」などのことばが現われる。この人も、資本主義に掉さして、現代流の耳目を引きつけることばや観念を使って議論することが分かる。それは、資本主義について近年書かれてきた注目すべき書物を読んで考えていることを示してもいる。しかしわたしは、「量子論の裏返し」というようなことばを使用して考えることが、自然科学の用語を不適切に使用したかつてのポストモダンな議論の轍を踏むのではないか、と恐れる。

第2章は、経済現象としての資本主義を、「剰余価値はいかにして生まれるか」という表題のもとに解説する。ほかの章もそうだが、この書物の内容と書き方は、ほとんど原形をとどめないほど加筆修正されたとしても、もともと筑摩書房の会議室で行なわれた4回の講義を芯にしていることに制約されている、と推測される。経済現象としての資本主義につ

いてのこの章の解説は、しばしば著者独特の眼を引く言いとりが現われるとはいえ、それほどの創見を含んでいるとは思えない。ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に基づいて、資本主義の特徴をキリスト教と結びつけて論じるのは、「観念の力」を押し出そうとする姿勢の現われと言えるだろう。キリスト教という一神教の理念型に注目し、予定説について多く考察する。資本主義経済がしぶとく生き残っていることを、「終わりの反復」というようなことばで理解しようとする。ここで「神」という観念を持ち出して考察することに賛成できない。

ヴェーバーの議論は、1500年代末ころ、プロテスタント信徒の多かった北西ヨーロッパを中心に資本主義の力強い運動が開始されたという実証的な観察事実根拠を置いて提言された。その立論は、厳格に言えば論証ではないけれども、重要な視点を提供し多くの有用な知見も含んでいて、人々に受け入れられている。

しかし、歴史をよく観れば、資本主義の助走の時代があったことが知られている。ルネサンスの時代に、中東との地中海交易を基盤にするイタリア北部から北西ヨーロッパへとつながる交易ルートが存在し、その商業資本主義の心臓部はイタリア北部にあった。1500年ころ、そこへ南北アメリカの富がヨーロッパに流れこむ大西洋ルートが加わり、ヨーロッパ経済が活性拡大して、経済の重心が北西ヨーロッパへ移っ

たのである。だから、商業主義として発展していった初期資本主義は、必ずしもプロテスタンティズムだけに助けられたのではない。それでも、資本主義をキリスト教と結びつける考え方をする人があるかもしれない。しかし、古くからインド洋に栄えた商業の要因にキリスト教精神を適用することはできないし、のちの時代に東アジアの宗教的心性を抱く日本や中国での資本主義の初動にキリスト教を持ち出すことは適切ではない。だから、キリスト教を資本主義の精神の中心に据える立論には限界がある。このぐらいの議論で大澤を言い負かすことはできないけれども、議論のバランスを維持するために触れておく。

さて、剰余価値について、「利己的な遺伝子」という現代はやりのことばに結びつけて観念の型として説明し、さらに、ヘーゲルの思弁的弁証法を継承して、「精神が成長しながら循環する」という理念型にまで高めようとする。「精神が特定の限界を設定し、実在を規定したことが、精神のさらなる拡張と一般化を動機づけます、……」などとする 143 ページのヘーゲル流の理念論を、園丁は大いに疑問に思う。そこに、カントを引き合いに出して、「主観的な印象（内部）と客観的な実在（外部）の区別」としておいて、「内部性の方に帰属する操作によって、つまり主体の超越論的な構成（超越論的統覚）の身ぶりによってもたらされる」という解釈をつけ加える。わたしは、科学の時代である現代の認識論について『科学的

『認識論の構成』という冊子で論じたが、カントの認識論にかかわる著者のこの解釈に同意できない。

そうした上で著者は、この章を、「内部の方から設定された限界が、外部をそれとして実在させる力を持ちます」とヘーゲル流の観念論で締めくくる。「観念の力」を持ち出すのが、そういう観念論に至るためだとすれば、わたしは首をかしげざるをえない。

第2章は、この著作の論説の方向を定めるための議論である。そして、「(続く二章で)近代社会を特徴づける二つの対照的な言説が、資本主義の運動に内属していること」を示す、という段取りになる。「その二つの対照的な言説とは、近代科学の言説と近代小説の言説である」と表明される(この主旨の文は第3章に二度現われる)。

そこで、第3章は近代科学に対する著者の考えが展開される。17世紀以降に出現した近代科学を科学革命と呼んで、著者の近代科学史の総括が語られる。その科学論に、理論物理学をかじったものとしてわたしは、多くの箇所に疑問符をつけた。ニュートンの『プリンキピア』をとり上げて(とくに万有引力に注目して)の議論中の文章は、正確さを欠き、時に独断的な言い方が目立つ。最大の問題は、ニュートン力学を理解するのに「神」という概念を持ち出して論を立てる点である。ニュートン力学を長期的な哲学史の中に置いて議論するときには、神の概念が登場することは許されるだろう。

しかし、ニュートンの『プリンキピア』は「定義」・「公理あるいは運動の法則」から出発する論理的な体系である。そこで、万有引力の式は演繹的に導かれる。ニュートンが神を信じていたかどうかとはかかわりなく、その体系は論理的な体系である。ニュートン力学を当時の哲学者のなかで最も理解したカントは、ニュートン力学を基礎に置いてその認識論を構成した。その「認識論」に神は登場しない。こう言うと大澤は反論するだろう。だがわたしは、ニーチェが、カントのせいで「神が死んだ」と言ったことが正しいと思う。ニュートン力学と自然科学そして認識論に神は必要ない。それは現代だから言えることではない。カントやニーチェの時代から、自然科学の本質がそうなのである。

大澤真幸という人は、鋭くて意表を突く文や論題に関連するさまざまな事項を結びつけるなど、言説に巧みな人である。だが、たとえば、抽象的労働力と物理学の力を対照させて得られるのは何だろうか。論理的対応を言えるかもしれないが、それがどんな意味を生み出すのだろうか。この章は、科学で知が増殖する運動を、資本が増殖して剰余価値を生む運動と結びつけて、議論するのだけれど、それによって、有効な意味をもつ言説を作り出せるのか、わたしは疑問に思う。

資本の運動は、市場経済の事象であり、経済的な要因によって引き起こされる。自然科学的知見の進展は、人間のかかわる事象であるが、得られる知見は本質的に対象である自然

を貫く法則性に基づく。人間の知見の進展は、資本主義が支配的な力をふるう社会で起きることだから、間接的に資本の運動に関係するだろう。それでも、長期的な自然科学的知見の進展は、本来的に自然に内在する規則に迫ることで得られるのである。資本の増殖を自然科学的知識の増殖と関係づけて語ることにはどれだけの意味があるだろうか。

大澤真幸という人の言説のもう一つの特徴は、知識がありすぎて議論が拡散することにある。その知識の開陳をその言説の魅力とする人が多いのだろう。しかし、この第3章で語られたことは、資本主義の〈その先〉を知るための議論になっているのだろうか。園丁が知りたい〈その先〉が先駆的にここに語られているのだろうか、うかつな園丁には分からなかった。

第4章の表題は「神に見捨てられた世界の叙事詩か?」である。いささか奇をてらう表題で始まり、また神という語が登場する。それはぜひとも必要な語なのだろうか。園丁はとまどう。この章の小説論が独立した冊子での議論なら、わたしも傾聴できたかもしれない。しかしこの章は、資本主義の先を論じる書物の不可欠な要素だとされるのである。わたしは難渋しながら読んだ。「小説という新奇な文学様式」という小節は、18世紀前半にヨーロッパ（イギリスを代表させている）で登場した小説を、「その内在的な性質が資本主義という現象と共進していた」ことを示そうとする。

たしかに、18 世紀初めに出版された『ロビンソン・クルーソー』や『ガリヴァー旅行記』を例に、初期のヨーロッパ近代小説についてさまざまな角度からの議論は有用だとわたしも思う。その二例の小説が、ヨーロッパ資本主義の第一期ともいうべき大航海時代から興隆期へ入ったところに現われたことが、小説というものがむしろ一般的に歴史的な事象としてあったことを示している、とわたしは考える。大澤のように資本主義とだけ結びつけるのではないやり方で論じることが可能だ、と思う。

日本を例にとってみよう。世界の文学史上で先頭に立つ『源氏物語』を近代的な意味で小説と呼ぶことができる。第一に、それ以前にあった伝統的な「物語」とは大いに異なる、そして、各巻はそれぞれ独自のプロットをもち、しかもそれらの全体的なつながりが構想されている。第二に、特定の具体的な状況の中に人物を配置する。第三に、登場人物は個性をもつ個人である。第四と第五に、主人公はまさしく時間的な経過の中で、リアルな空間的な移動をする。第六に、紫式部は力強い文体で人間の心理を描く。『源氏物語』は、大澤が列挙した西洋近代小説の特徴をみな十分に具えているのである。それを資本主義に結びつけて論じるのはむなしい。

18 世紀中ごろの『春雨物語』は大澤が列挙する近代小説の特徴の大部分を満たす。19 世紀のフローベールの小説とくらべるのは酷だけれども、『ロビンソン・クルーソー』や『ガ

『リヴァー旅行記』よりも進んだ小説である。それは、当時の大阪が規模は小さいけれども近代市民社会と呼べる社会だったからだ、とわたしは考える。その社会は商業の芯にある資本主義的な性格をもっていたということができ、大澤の主張と部分的に重なる。けれども、それを資本主義だけに担わせるのは行きすぎだ、とわたしは考える。

もう一つ、「小説」という中国語や日本語の成り立ちを考えても、大澤の立論に無理があることが分かる。「小説」という語は、古代中国で、立派な君子の書く文章とは異なる書き物という意味で、軽侮をこめる語であった。それが、時代を経るにつれて内容が豊富になり、近代に近づくころには、文学の広い範囲を覆うほどのものになったのである。近代から中国や日本で小説ということばは、そういう広くて価値ある言葉になった。この「小説」という語の歴史をたどれば、言語と理性をもつ人間が考えたことを表現しようとする、生来の性質から小説が生まれたことが明らかになる。小説には小説の自律的な発展の機構がある、ということができる。それを資本主義とだけに結びつけるのは考えを狭めることだ。

これ以上著者の向こうを張って論じるとぼろが出るのでやめておこう。大澤は、第4章の最後に、「資本主義なるものを成り立たせている同じ社会的なダイナミズムが、言説の領域では、近代小説を生み出し、またその繁栄をもたらしているのではないか」と主張をやわらげて表現している。けれ

ども、わたしが上で挙げた論拠からすれば、ある発展段階の社会がそれに応じた小説を生んだという見方の方がより正確だと考える。それが資本主義だとは限らない。ただ、近代小説というときは、資本主義が社会に一番大きな力を及ぼしているから、資本主義ということばを使用するのが許されるのである。それでも、小説という言説には、言語をもつ人間の本性が社会と時代に応じたやり方で現われる、というのがより真実だと考える。

ここで、科学と小説にはそれぞれ固有の進展のメカニズムがあるという論点とは別に、第3章～第4章のアプローチに対してもう一つの批判を加えておこう。

資本主義そのものに対して、考察は、その興隆の時代にさかのぼる方向にしかなされていない。しかし、それから少なくとも見積もっても400年以上経過した現在、資本主義の進展は大きなもので、著者が資本主義が終わることに疑問符をつけるほど“高度化”している。その現在の資本主義の特徴を明確に把握するのではなければ、その突破口を見つけ出し、その先を見通すことはできないだろう。この書物は、そういう考察に力を尽くさず過去に目を向ける。同じく、自然科学の進展はこの300年間に目覚ましいものだったが、それについての議論は少ない。人間の本性に根ざした小説のような文学の進展はゆっくりしたものではあるけれども、20世紀を代表するジョイスやプルーストやカフカなどの小説は近代初期の

小説と大きく異なる。それを資本主義の進展と対照させて論じることは可能かもしれない。著者の主張を貫くには、過去だけではなく現代に注目して論じることが必要だろう。とにかく、現在に近づく時代の社会システムをもっと議論してほしい。

さらにつけ加えれば、「観念の力」を強調する立場からそうなるのだろうが、考察はたいてい過去の著名な思想家の提出した観念のまわりでなされている。しかし、ポパーが提言したように、反論できる論拠を挙げて議論するのでなければ、考察は空回りする。有効な議論のための反証可能な論拠は、過去の文献よりも現代の事象をとり上げるべきだろう。たとえ、論点を明確にするために解釈を行なうのだとしても、資本主義の先への議論を収束させるには、マルクスの言うように「解釈ではなく変革をもたらす」ような言説が必要なのはである。残念ながら、第2～4章にそういう考察は足りなかった、と言わざるをえない。

そのことが、最終の第5章にあらわになる。最終章なのに、また、大澤流の拡散する議論が繰り返される。たとえば、「とりわけ言説において、資本主義の中核的な特徴が現われるのです」というような文が現われるが、その論拠はそのあたりの文脈に見つからず、独断的な命題の提示のように思う。この章の大澤の議論は、著作の表題に掲げた大きな論題に答えることのむずかしさにとまどって、揺れ動いているようにわ

わたしには見える。資本主義が終焉を迎えようとしているという最近の議論を紹介したところに、歴史についての理解が示され、行動の必要性が言及される。ところが、そういうことがよく分かっているのに、この章には逡巡のことばが漏らされる。そして、「私はこの問いに深入りするつもりはありません」という表明がなされる。このことばは、この著作の考察が、深入りすることができるほど十分ではなかったことを告白しているように、わたしには聞こえる。

それでも、著者は、「資本主義がどのように破綻し、終わるかということには深入りせず、資本主義の〈その先〉の社会について考えている」と主張します。現代の資本主義の問題に深入りせずに、どうやって、資本主義の〈その先〉を人に説けるのでしょうか。驚いたのは、「抽象的・論理的なレベルでのみ、可能な社会の構想を示すことがわたしの方針です」という文章です。この文は、大きな表題を掲げておいて投げ出してしまう宣言のように聞こえ、あたかも、大澤真幸という優れた社会学者が、自分の立てた問題の大きさと困難さに立ち往生している、と見える。そこには、「思考は、行動に対して本質的に後れをとるものです」という言い訳めいたことばがある。このことばは真実だとわたしも思う。けれども、あるいはだからこそ、現行の資本主義を乗り越えようとする多くの考察や行動の提言が行なわれているのではないだろうか。それをあと押しする議論が欲しかった。

後註：この考察のあと、斎藤幸平著『大洪水の前に マルクスと惑星の物質代謝』を読んだが、斎藤は、マルクスが、フォイエルバッハの哲学に大きな影響を受けていたころ、「あらゆる歴史的分析を抽象的で非歴史的な“本質”へ還元してしまう傾向にあった」ことを指摘している。考察が観念だけにこだわる議論になりがちだったということである。この指摘は、大澤真幸の考察にも当てはまるのではないだろうか。

Ⅲ. T. ピケティ著『自然、文化、そして不平等』

こうして、一目置かれる知識人が書いた大きなタイトルの二冊の書物を読んで、園丁は失望を味わい、途方にくれる思いになった。これからの社会がどんなものになるのかわからないままに余生を送るほかないのか。しかし考えてみれば、結局、人類はそういうふうにして歴史をつくってきたのだ。自然を対象とする自然科学でさえ、自然について知っていることは少ない。人は、眼前で起こる自然と人間と社会の事象をよく観察して、自分なりの判断を育んで生きていくしかない。たとえ余生が短いとしても。

そう思っていたら、T. ピケティの『自然、文化、そして不平等』という翻訳本が出版されたことを知って、手にとった。フランスでの講演録を書物にしたもので、90 ページ足らずの分量しかないが、しっかりした装丁の本にされている。

ここで一言：世界中に名の知られたピケティの書いたものは売れると踏んだ出版社の企画だろう。本の帯には「斎藤幸平推薦」と書かれている。ここで読んだ本などがインターネットでどう出てくるかを見れば、商業出版の活動が知られる。斎藤幸平と大澤真幸の立場は異なると考えられるのに、『未来のための終末論』という書物に斎藤幸平が対談者として登場するようだ。斎藤が大澤流の観念的「終末論」を飾るために引っ張り出されたことに当惑してしまう。また、斎藤が売らんかなの出版社に利用されて軽い本をいくつも執筆していることも心配である。斎藤幸平が取り組んでいる実践的な活動が資本主義システムに打撃を与えるために必要だと考えるけれど、他方で、この人には、『大洪水を前に マルクスと惑星の物質代謝』で示したような、しっかりと腰をすえた研究に取り組んで、思想的にも影響力ある書物を出版してほしいとも思うから。

余計な注記を記したが、ピケティのこの講演録を軽んじようとしているのではない。むしろ、この書物の内容は上の二つの書物の議論を置き去りにしてしまうほどの力をもつ、と言いたいのである。経済学者であるピケティは、社会で現実に関測できる事実をデータとして示した上で、しっかりした議論を展開し、さらに、問題のあるその現実を変えるための実行可能な提言を提出する。この点が、上の二つの書物に勝る力を生み出すのである。人々が、そこで示されている事実である観測データを、自分の生活に照らして腑に落ちるほど理解するなら、現在の資本主義システムを変えようという運

動が起きるだろう。

ピケティは、ベストセラー『21世紀の資本』出版後その思想を進化させたが、この講演で、最も肝要な「不平等」に焦点をしぼって語る。要点を整理して受けとめよう。

最初に観点が明確にされる。社会的経済的な不平等は、社会によってさまざまだが、実証的研究によれば、密接に関係する経済・政治・文化・文明・宗教のなかでも政治が大きな原因だ、とスウェーデンの事例を挙げて説明する。ピケティは、長い歴史の統計的な分析から、かすかながらも平等に向かう傾向があることを指摘し、スウェーデンの政治史的な歩みを解説しながら、社会的な闘争がきわめて重要な役割を果たすことを明らかにする。

ピケティの進境は、この講演で、自然破壊・生物多様性の危機・地球温暖化・二酸化炭素排出などの地球規模の危機という問題を挙げるところに示される。上で考えた二つの書物が対象とする問題をピケティも主題の一つとしているのである。“不平等の解消なくしては、また、資本主義を超える経済システムなくしては、それらの問題を解決することはできない、自然と人間の共存も不可能だ”と言う。そして、その新しい経済システムは「民主的でエコロジカルな参加型社会主義」だと特徴づける。この短い言葉だけでは十分説明できていないが、政治的なリスクを引き受けて明確に社会主義的立場を表明している点で、前二著の著者よりも実践的な行

動に踏み出している、とわたしは思う。

ピケティの考えを支えているのは、所得と資産についての統計データである。それは、資本主義を超える社会をつくりだすために、誰にとっても必要な基礎知識である。世間での評判を間接的に聞くのではなく、多くの人が、直にそのデータを眺めて考えることが必要である。そこには、世界の国々で所得格差と資産格差がどのようになっているかや、日本での所得の分配がヨーロッパに比べて不平等であることが図に示されている。19世紀からの長期的な統計とその解析が、ヨーロッパの国々で平等への歩みがどのようなものであったかを教えてくれる。

ピケティは、歴史的な分析によって、所得と資産に対する累進課税が実際に平等を推進することを明らかにする。先進国のどこでも債務の問題は危機を深めていて、日本人にとってはとりわけて不安な問題だが、非情な歴史が、過去の債務問題は踏み倒しかインフレによって帳消しにされたことを教える。そう聞いてこの危機を軽視してはいけない。その現場に置かれた庶民は実際にひどい苦しみを味わうのである。

ピケティは、単に金銭的な再分配だけが資本主義の問題解決ではないことを強調する。教育・健康・医療・年金・住宅・インフラといった分野で脱市場化がみられることは、経済というもの市場や資本主義の論理の外でも十分に運営でき

ることを示す、と述べる。教育をはじめとするそれらの分野での改革の運動が、科学や小説の論理を究めるよりも、資本主義の論理を抜け出すのに役立つのである。ピケティの提言は、常識的すぎて終わらない資本の増殖運動を乗り越えることができないと考える人がいるだろう。それでも歴史は、その時々可能な実践的な行動によって変遷していくものである。あらゆる行動を試すことが必要だ、と園丁は考える。

結論の前にある小節のタイトルは、「自然と不平等」である。自然破壊の問題は、不平等を大幅に減らすことなく、また平等に向けて新たな前進をすることなく解決することは不可能だ、とピケティは言う。この問題はまた南北問題に係しているということを漏らさない。

結論の先頭に、「過去のデータを収集し分析する作業を続けていけば、将来の変化を見通し、未来はどのような形をとりうるか予測するための情報を豊富に入手できるはずだ」と書かれている。これはまったく正当なアプローチである。ヒッケルと大澤真幸の考察にはこの堅実な姿勢が足りない、と思う。二元論をアニミズムに戻す哲学論を唱え、重要な観念を特徴づける論理だけをあぶり出しても、資本主義のすぐ先の世界を絵に描くことさえむずかしいだろう。資本主義のその先へ続くだろう今実行可能な動きを作り出すことが重要なのだ。

資本主義の問題、経済・財政・公的債務・富の分配といっ

た問題を解決するために今必要なのは、広い分野の研究者の参画である、とピッケルは言う。歴史に学び空間的な比較に視野を広げることの重要性を言う。これらの強調は、実際的な研究やアプローチが事態を動かすと言いたいのだと思う。末尾で「運動」が重要なことを言い忘れない。

2023 年 9 月秋彼岸過ぎ

海蝶 谷川修